

第三章 マラリアとの闘い

マラリア発病（昭和十九年六月中旬から下旬にかけて）

さて、六月末頃になると私の体調に変化が現れ始めました。それは午後二、三時になると発熱し、体が震えてくるのです。それで一番物知りの高島上等兵に聞いてみると、

「それは、この熱帯地方で一番厄介なマラリアという病気だ。ちゃんと手当てしないと命がないぞ。病院に行つて診察してもらわないと」と言われ、分隊長に報告しました。分隊長は南東七キロ程先のレザーセという所の野戦病院に行くように言いました。そして、連隊の軍医に診てもらい、衛生兵に書類を作ってもらいました。

レザーセの病院へは七月二日の早朝に出発しました。前日には分隊長へ、朝礼の時には分隊長へ報告しておきました。当日は三十分ほど早めに出発し、病院へは九時までには到着の予定でした。ビルマの雨季というのは、降ったりやんだりの繰り返いで、時には猛烈に降ることもありますが一、二日止んでいることもあります。特にビルマとバングラディッシュの国境付近は世界的にも雨量が多いということです。

私は自分で野戦病院まで歩いていくのですが、いつもの牛車の道を通っていきます。一メートルほどの流れの岸辺に細い竹が立ててあり、それを頼りに歩きます。三十メートルか五十メートルごとに一本ある竹が道案内となり、私を元気付けてくれるのです。竹の並びが谷間の方へ向かい、その谷間を三百メートルほど行くと谷間の幅が狭くなり、その両側に病室が並んでいるのが見えました。

竹で出来た建物で、直径四、五センチの竹を割った一・八メートル位の長さのものへ椰子の葉を取り付け屋根や壁を造っていました。これで暑い気候に対応した住居になるのでしょうか。十人くらい収容できる家が並び、軍医さんの診察室はひと回り大きな部屋にしてありました。すでに七、八人の患者が来ておりました。手帳を提出して身分証明書を出して、待つこと一時間。やっと診察です。一週間ほど前からの病状を言い、診察を受け、終了後に、

「尾崎君は、どこ出身か？」と聞かれ、

「はい、私は香川県三豊郡庄内村、大浜です。」すると、

「おお、大浜か……。」と一声。

その一声が懐かしい大浜訛りでした。そして、

「上手に治さなければ命を落とすから、無理をするな。バンコックかシンガポールへ送ってやるから早く治して帰って来いよ。」と言われました。それは、患者を元気づける優しい言葉でした。

それから一週間、午後が来れば毎日身体が震え、四十度ほどの熱が出ます。熱は一、二時間で下

がるのですが、どんどん体力が消耗していきます。この病院に来て五日目くらい経ったときです。この谷間に来る途中、山の中腹にオレンジの木があり、夏オレンジがなっているという話が出ました。入院患者でも比較的元気な者は採りに行こう、ということになりました。私も行きたかったのですが、毎日熱を出しているので止めておきました。

彼らは一時間ほどで帰ってきましたが、何も収穫はありませんでした。木の下まで行って黄金色のみかんを採ってみると、とんでもなく強烈なおいがして食べるどころではなく、鼻も近づけないほどのキツイ臭いだったようです。なかには勇気を出して口に含んだ者もいましたが、恐ろしい苦味でまったく話にならず、何も持たずに帰ってきたのです。しかし、そんなに強烈な果物なら、せめて一個くらい持ち帰って見るだけでも見たかったことだと残念に思いました。今の私たちが口にいるみかんは、とんでもない原種から進化して、何百年もの歳月をかけ、ここまで美味しいものに改良されたのだな、としみじみ思われます。さて、その野生の原種のオレンジの実はその後どうなったのでしょうか。どこかに又芽生えて、鳥に運ばれ、又違う場所で芽生えて、ずっとこれを繰り返し、人間に食べられるようになるには、まだまだ何十年もかかるのでしょうか。

私は七月二十日午後に、ミンビアの病院に移動すると知らされました。レザーセの病院で一ヶ月近い時間を過ごしましたが、その間に私の病気について悪い前触れを見ることになったのです。それは入院後二十日位経ったときです。私の病室のすぐ前に幅五メートル位の小さな川があります。その中へ三十歳前後の患者が入って、寝転がって二時間ほどそこにいて遊んでいるようにも

見えました。驚いた私が隣の人に尋ねると、

「あの人は、もうお迎えが来ているのです。そのうちに帰りますよ。明日はもう来ないでしょう。」と事も無げに話すのです。その病人は熱が脳漿に付いて気が狂っていたのです。明日は来ないという事は……マラリア熱が頭に付けば必ず死ぬだろうと言ったのです。それは、私にも同じ危険が迫っていることなのですが、その時は気づきませんでした。

七月下旬、レザーセ野戦病院よりミンビヤ野戦病院へ

その五日後がミンビヤの野戦病院に行く日でした。その日の夕食と明朝食を飯盒に入れて午後二時出発しました。誰の見送りもありません。持っているのはこの病院のカルテだけです。二十五日前に通ってきた道を二キロ程南に下りました。前と同じように竹の棒が立っている道を行くと、一艘の丸木舟がいます。そばに日本の衛生兵とビルマ人船頭が二人いました。この舟は長さ七メートル位、幅は九十センチか一メートル位で、舟の中心に丸い屋根があり、その半分は私で、残りの半分は日本兵の患者でした。ビルマ人船頭が、前と後ろで竿を持っています。

「あと、三十分で出発します。明朝八時頃、ミンビヤまでの途中のマンガロブの茂った中へ止めるので、そこを午後四時に出発して、次の日の朝にはミンビヤへ到着します。その後二日ほどしてタンガップまで送ります。」という事でした。私より先着の患者へ、

「私は八四一五部隊、通信の尾崎一等兵です。」と挨拶しましたが、全く反応はありませんでした。その後ビルマ人船頭二人が変わった声で合図して、少しずつ舟が動き出したのです。日が落ち、暗くなると舟の先に赤黄のカンテラが付けられました。私どもの船団は十艘位と思います。その夜は雨雲がいつぱいで真っ暗でしたが、カンテラのおかげで水面が良く見えるのです。この人たちは自分で前進、後退はしません。どうやら河の流れと海水の干満を利用して舟を動かしているようでした。

英印軍は患者の運搬には機動力の付いた舟を使うか、ヘリコプターですが、日本軍の場合は丸木舟を使って、何日も掛けて運ぶのです。早く後方へ移動させて手当てを受ければ治る病人も、この状況では手遅れとなり無駄に命を落とすことも多いと思います。

翌朝マンガロブの森林のようなところに舟が着きました。



朝八時頃から四時まではここにいます。舟にいるか、マングローブの木の下に居るかと思われるので、マングローブの木の下にいますと答えました。四時に迎えに来るので必ずここにいてくれと言われて舟を降りました。この場所は潮の干満の多いところで、干潮の時には飯盒炊飯が出来ますが、満潮時には二十センチ位の水が来るといことです。私はここで干潮の時に巻貝の一種を拾い、煮て中身を出し味噌を入れてよく煮て食べました。それが、死神に引き込まれるほどの災難に繋がったのではないかと思うのですが。

このマングローブの林の中で一人、八時間ほど待ちました。船頭さんはきっちり四時に迎えに来ました。私の隣の病人は生きていますのか死んでいるのかよく分かりませんでした。時折動いたようにも思えたのですが、最後まで生死は分かりませんでした。四時より下り、潮流に乗ってミンビアの病院まで送ってくれました。朝の六時頃到着しました。

ミンビアの病院は河の岸ですが、棧橋での干満は余りなさそうでした。マンゴー林のような林の中でビルマハウスの病室に入りました。ここへは英軍機が度々来ていますが、この病院への攻撃は一度も無いようです。英軍の目標はタンガップからの日本輸送船を攻撃することです。余裕のある英軍です。

私にいたっては今年一月一日より、徒歩でタンガップ、プチドンの道を行軍しているのですが山側の道を通ったからか、ミンビアという町は全く知りませんでした。ここまではすべて夜の移動だったからか、全く地域、地形が分からないのです。病室よりちよつと出て歩いてみると、前

に河か小さな海のような景色があります。地図上では陸になっていますが、この付近は河か海かよく分かりません。

ちょうどその時、マングローブの森の中より、一艘の木造のエンジン付き船が現れました。この船は何だろうと思っていると、すぐに英軍の飛行機が現れました。この飛行機は船を五十メートル位越えて、二分ほどして今度は攻撃の態勢で入ってきて機首を下げたかと思うと、ダダダーと機銃が火を吹きました。と同時に火の手が挙がりました。何を積んでいたのか分かりませんが五分か十分で何も見えなくなっていました。日本陸軍のダイハツという輸送船はマッチ箱だと聞いていましたが、まさにマッチ箱のような燃え方でした。この船に二人の兵員が乗っていたのですが、英軍機が回ってくる間に船を脱出したのではないかと安否が心配でした。私が直接耳にしたことではありませんが、次のような話がありました。この船のエンジンは自動用のエンジンで燃料にガソリンを使っているのです、マッチ箱のような燃え方をしたのです。戦いの道具に火の出るものは厳禁なのに改善されていなかったのでしょうか。この船には二名の兵士が乗っていたと思われれます。

私ども後方へ下る兵隊が、約二十時間かけてタンガップに行くはずだった船はなくなりました。次の船はいつ来るか分からないということでした。